

セラムック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.13

編集) 1986・3・31
発行) 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 藤山 隆
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部字田ノ平乙
3100-1
電話 09554-3-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町甲
2476-21



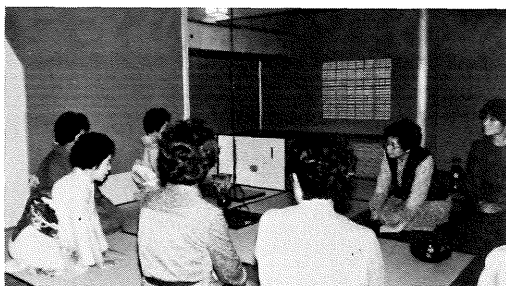
はくじ ききょうがたむこうづけ
白磁 桔梗形向付

佐賀・有田皿山
江戸前期 (17世紀後半)
口径 9.6cm 高さ 6.6cm
高台径 4.0cm

内側は型によって形をととのえられ、外側は大
胆な鑄ぎによって面をつくっている。7弁からな
り、それぞれが2面づつの面からなる。輪花状の
曲線と、鑄ぎによる直線が調和し、リズムカルな
美しさをかもしだしている。古窯跡出土品では、
ダンバギリ窯の同型品がある。

「九州の茶陶」展と 協賛茶会

開館5周年を記念して「九州の茶陶」展が昭和60年10月12日(土)から11月17日(日)まで開催されました。大井戸茶碗「美濃」(五島美術館)などの高麗茶碗、絵唐津菖蒲文茶碗(田中丸コレクション)などの唐津焼、幻の窯といわれた小倉茶園場窯^{さいくらんば}の作品と考えられる上野矢筈口水指、高取茶入の最高傑作のひとつ高取茶入「花染」、細川家伝来の八代象嵌牡丹文茶碗(永青文庫)、小堀遠州が銘をつけ、中興名物にとりあげたといわれる薩摩褐釉皆口茶入「後藤」(根津美術館)など日ごろ身ぢかにお目にかかれない九州の茶陶の名品群176点。そして現代作家の茶陶の秀作77点、さらに古窯跡の茶陶の陶片群が陳列されました。おかげさまで1万6千人余もの多くの方々にご覧いただくことができました。また、この展覧会にあわせて、佐賀県茶道連合会の主催で協賛茶会を開いていただきました。10月27日(日)、宗徧流と皇風煎茶礼式。11月3日(日)、鎮信流。11月10日(日)、裏千家流。11月17日(日)、表千家流と日本礼道小笠原流煎茶。これらの茶会には2千人もの方々が参加されました。11月3日(日)には記念講演会が開かれ、当館顧問の永竹威成先生が「九州の茶陶」についてお話し下さいました。



昭和60年10月27日 宗徧流



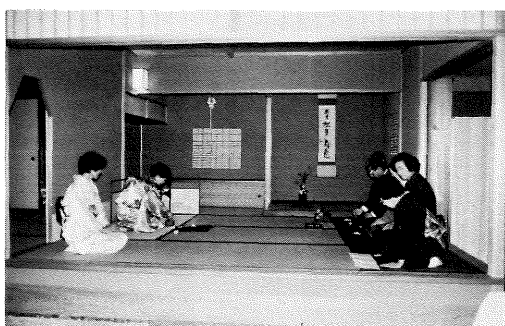
昭和60年10月27日 皇風煎茶礼式



昭和60年11月10日 裏千家流



昭和60年11月10日 裏千家流



昭和60年11月17日 表千家流



昭和60年11月17日 日本礼道小笠原流煎茶

開館以来40万人目の入館者

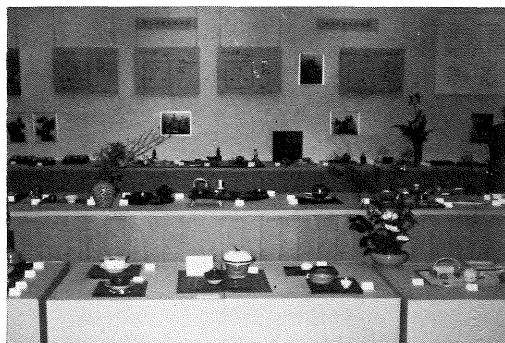
昭和60年11月10日午後12時50分、開館以来40万人目の来館者を迎えました。訪ずれたのは佐賀県伊万里市南波多町谷口の主婦高田チヨ子さん（63才）。高田さんには、佐賀県窯業試験場製の「染付花紋瓶」（胴径25cm、高31cm）と茶陶展図録が贈呈されました。「うれしい。幸せだ。床間に飾って記念にしたい」とのご感想でした。またその前後に来館した氏田エキ子さん（福岡市博多区、65才）と福田久美子さん（佐賀市嘉瀬町、23才）にも、佐賀県窯業試験場製の「染付地紋一輪差」（胴径9cm、高26cm）と図録が贈呈されました。5年と10日で40万人目を迎えたことになります。



中央が40万人目の高田さん

おもてなしの心 懐石の器展

11月23日から12月1日まで、当館の第1展示室において、「おもてなしの心 懐石の器展」が開催されました。懐石料理のよさを紹介し、またそれに用いられる器を有田の各メーカーが、様々なかたちで提案しました。初期伊万里の組み合わせによる懐石膳の例も紹介され、料理と器という今までにない展示ができました。主催は有田陶交会と大有田焼振興協同組合と当館の3者です。有田陶交会とは、有田の若手窯元の研究会です。今回は32社が参加し、出品総数は500点近くになりました。毎週日曜日にはお茶のサービスがあり、大変評判がよかったようです。入館者数も8日間で3489人となり、初めての試みとしては成功のうちに終了することができました。



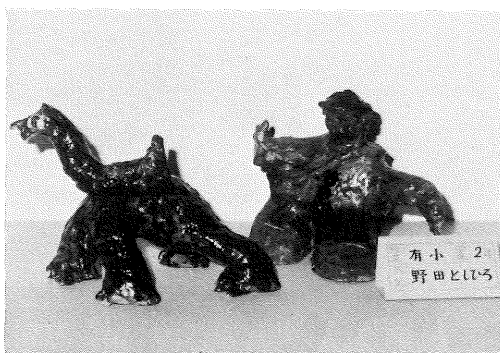
懐石の器展会場風景



懐石の器展ポスター（4種のうち）

第4回 西松浦郡小中学校児童・生徒 工芸・彫塑・工作展

昭和61年1月21日から26日まで、当館の第1展示室において、西松浦郡内の小中学校児童生徒の作品展が開催されました。主催は西松浦郡造形教育研究会と当館です。子どもたちの心暖まる楽しい作品や、子どもらしい自由なアイデアにあふれる作品が展示されました。木工や絵画の作品もありますが、やきものの町らしく、陶磁器の作品が主流をしめました。



有田小学校2年 野田としひろ君の作品

陶芸教室だより (Ⅰ) 第 7 期

第7期の陶芸教室は、昭和60年6月22日にはじまり8月24日に終了しました。毎週土曜日の午後2時から5時まで全部で10回の講義と実習がありました。講師は佐賀県立有田工業高等学校窯業科の大宅利秋先生です。受講者は定員の20名でした。一番若い人は22歳の学生さんで、鳥栖にお住まいの方です。一番年輩の方は、有田町に住む70歳のおばあさんでした。開講式では陶芸教室に応募した動機を語っていただきましたが、有田に永年住んでいても、粘土にさわって自分で器を作るという機会が以外に少ないものだそうです。陶芸教室では、大宅先生の見事なロクロの技にみんな感嘆しました。陶芸教室というとすぐにロクロを思い浮かべ受講生の方々は、一度は挑戦してみたいと思っておられるようです。しかしロクロで器を形成するのはなかなか難しく、完成品はほとんどがひも作りによる作品となりました。花瓶や壺など自由で個性的な作品をそれぞれ手にして、なごやかなうちに閉講式が行なわれました。



第7期修了生の皆さん



第7期生 清水ツヤさんの作品

陶芸教室だより (Ⅱ) 第 8 期

第8期の陶芸教室は、9月7日から始まり、11月30日に終了しました。回数は7期と同じ10回ですが、途中台風のために、2回延期になったために、少し遅れてしまいました。しかし制作の進行が遅れている人にとっては、恵みの雨となったようです。講師は佐賀県窯業試験場の技師高石次郎先生です。若い先生でみんな楽しく勉強できました。受講者は20名です。21歳の若い女性から68歳のご年輩者まで幅広い受講者が集まりました。高石先生の講座でユニークだったのは、陶器の他に磁器による作品を制作したこと。従来の陶芸教室では磁土はヒビ割れなど手びねりとしては不向きな点が多いとされ、もっぱら陶土による制作ばかりでした。今回は磁土を用いて、ボタンや印鑑などを作り、また染付も少しだけ経験することができました。陶芸教室は初心者を対象とした講座ですが、なかにはプロも顔まけの絵付けをする人がいたり、釉薬の特色を知らずに重ねがけして思わぬ効果が生まれたりしました。



第8期修了生の皆さん



第8期生 黒川栄さんの作品

〈速報〉

広瀬向2号窯（前窯）の発掘

広瀬向窯跡群（西松浦郡西有田町）は、16世紀末以来の窯業地広瀬山において17世紀中葉以降の中心的な窯であった。『皿山代官旧記覚書』天明7年（1787）に「広瀬本登」は33室あった窯が破損したので藩より借金して15室分を築き直すとする。文化11年（1814）には広瀬本登16番（室）とあり、安政6年（1859）の『松浦郡有田郷図』には本窯跡部分に16室の登窯が描かれている。

この広瀬本登の変遷を明らかにするために、60年度国庫補助事業『肥前地区古窯跡詳細分布調査』の対象として、昭和60年12月6日～20日にかけて発掘調査を実施した。2号窯跡の窯体は現地表に一部露出しており、焼成室の奥壁幅7m前後であり、窯壁には耐火粘土を煉瓦状に固めたトンバイを用いている。物原は窯の左側にあり、今回の調査はこの物原に5m×2mのトレンチを設けて深さ3.7mまで掘り下げた。物原の堆積層は地表下3.2mまで、整地層や休止期と推測される腐蝕土層を含む11の堆積層がみられた。またこの物原の下、地表下3.7mに古い窯の焼成室の奥壁を発見した。この古い窯は、温座の巢の上から天井の一部まで遺存しており、極めて保存状態が良いことが確認された。

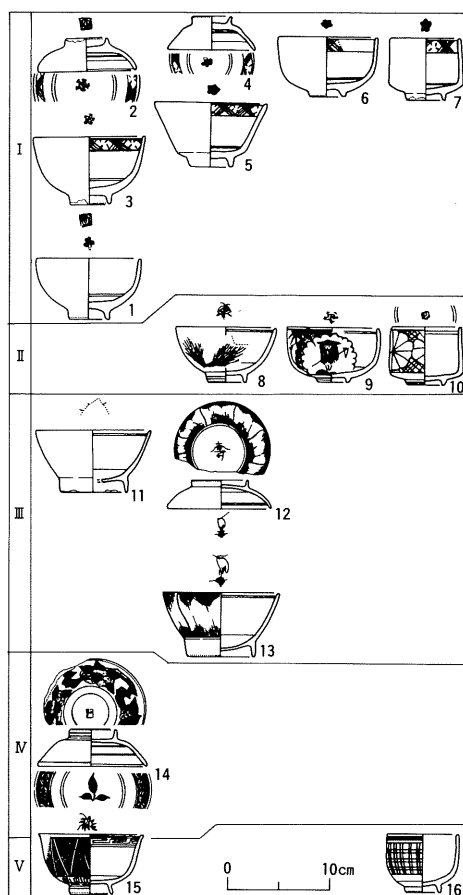
出土した製品をみると物原層は5つに大別できる。これを古い方（最下層）から順にみると、まずⅠ期の層は青磁染付碗が主である。青磁染付碗のうち表の1と4～7は見込五弁花文をコンニャク印判で染付しているがかなり崩れており、コンニャク印判手法の盛行期18世紀前半ごろを過ぎた時期のものとみてよい。また高台内の渦福字銘もかなり略化しており、これらの年代の上限は18世紀中葉と推測している。次のⅡ期になると青磁染付碗に加えて染付筒形碗（10）、小丸碗（9）などが現れ、窯詰道具としては三足付ハマやチャツが加わる。Ⅲ期では蓋付の染付広東形碗が主となり、青磁染付碗との割合が逆転する。Ⅳ期には染付広東形碗に加えて蓋付端反碗（14～15）が加わるいっぽう、筒形碗は減少する。Ⅴ期には染付端反碗が主となり、広東形碗は減少する。筒形碗は消え、見込に五弁花などを描いた小丸碗も減少する。蓋なしの小碗としてはこれらに替って内の深い小丸碗（16）が現れ多くなる。また染付や青磁染付の皿、鉢類が急増する。本窯はこの後も明治期には型紙摺や色絵素地の鉢類を作

っており、少量の銅版摺がみられるからこの銅版摺を焼造する明治末期ごろに廃窯になったと推測される。

以上のうち1810年開窯の小樽2号新窯になく、本窯Ⅱ期に現れⅢ期に多い染付筒形碗の年代については、伊万里市の文化4年（1804）墓出土の^注碗が10と同様の碗であることや、『守貞漫稿』（1853年）に茶飲茶碗（蓋なし）として「朝顔形茶碗 口径二寸六七分外准也。筒茶碗 口径同上。文化頃迄ハ上ノ二品ヲ専用ス。また「文化以来ヨリ小形ニテ図の如キヲ三都トモ専用ス、（中略）上ノ二品廃セリ、筒形ハ特ニ廃セリ」とある。この筒形碗は描かれた図からも10のような碗とみられるから筒形碗の下限年代は記録とも符合する。替って現れる小形の碗とは16のような碗と思われる。本窯の調査によって18世紀後半から幕末にかけての碗の変遷を知る手懸りを得ることができた。

（大橋康二）

注 古賀稔康「五ッ割みかん文茶碗に就て」
からすんまくら21、1978



広瀬向2号窯物原における主な碗の変遷図

展覧会のお知らせ

特別企画展

「白磁の美」

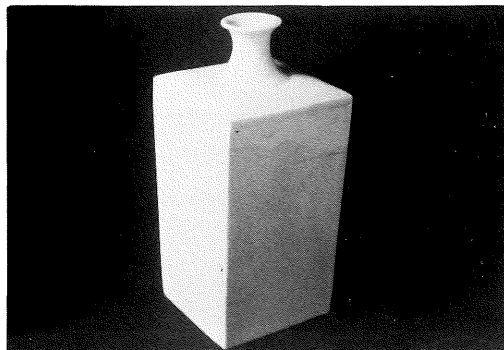
10月11日から11月16日まで、昭和61年度の特別企画展「白磁の美」を開催します。

白くて硬いやきものを一般に白磁とよびます。軽く叩いてみるとキンキンという金属音を発し、また薄いものであれば、光にかざすと透けて指のかげなどが見えます。この透光性も磁器の条件の1つですが、今回の展覧会では、白磁で透光性のないものも、広い意味での白磁としてあつかっています。

陶磁器は大別して土器と陶器と磁器にわけられますが、その磁器のうち、絵付けの全くないものを白磁といいます。白一色の磁器ということです。しかし文様がないという意味ではなく、器面に陽刻文や陰刻文による様々な文様があり、また白一色といってもそれぞれ微妙な色調があります。そうした一見単調にみえる白磁の製品も、比較してみると、各時代の原料や技術により、無限の色調と形態が創出されています。本展は、まず白磁の源流を中国にたどり、その展開において各時代の特色ある白磁を紹介します。朝鮮の白磁は高麗白磁にはじまり、李朝の白磁を紹介しますが、初期伊万里との関連性を製品で示唆するのも課題の1つであります。我国の白磁は、17世紀前半の初期伊万里(佐賀県)をはじめ、平戸焼(長崎県)、須恵焼(福岡県)、網田焼(熊本県)、平佐焼(鹿児島県)、末広焼(大分県)、小峰焼(宮崎県)など九州各地の白磁を展示します。また日本各地の磁器窯のうち、白磁の製品が確認できるものは、つとめて紹介するつもりです。これまでの調査で、砥部焼(愛媛県)、出石焼(兵庫県)、京焼(京都市)、会津本郷焼(福島県)、切込焼(宮城県)などが確認できました。今後山陰地方や東海地方について、調査や出品交渉を進める計画です。

日本の近世から近代にかけての各地の白磁を紹介したあとは、板谷波山以降の近代、現代の陶芸作家を約40名選び、その方々の白磁の作品を展示します。板谷波山をもって近代的な陶芸家の起点とし、白磁という素材を、すぐれた陶芸家やデザイナーが、どのように解釈し表現してきたかを紹介します。

出品点数は総数180点、内訳は中国10点、朝鮮10点、日本の近世120点、日本の近代現代40点の予定です。その他、古窯跡出土陶片も展示します。



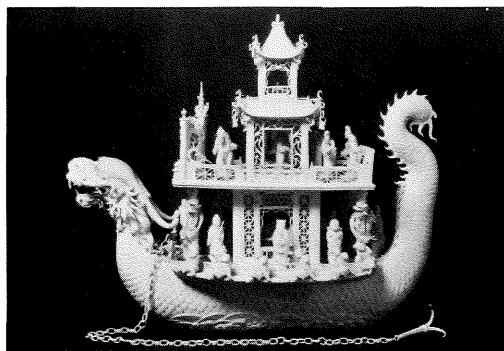
はくじかくとっくり 有田 江戸前期(17世紀後半) 館蔵



はくじようしゆくしんしもんかびん
白磁陽刻四君子文花瓶
三川内 江戸後期(19世紀) 個人蔵



はくじようしゆくぼたんもんぢ
白磁陽刻牡丹文鉢 網田 江戸後期(19世紀前半) 館蔵



はくじりゅうせん
白磁龍船 景德鎮 清時代(19世紀) 館蔵

シリーズ
やきものにみる文様 (11)
うめ ばち
梅 鉢 文 様

ウメはバラ科の落葉高木。中国原産で奈良時代以前にわが国に渡来したといわれる。早春、葉に先立って香りのよい五弁花が咲く。色は白、紅、淡黄などがあり、八重咲きもある。万葉集5・818「春さればまつ咲く宿の烏梅〈ウメ〉の花ひとり見つや春日くらさむ〈山上憶良〉」のように、万葉集にはウメの花が114首もよまれているという。梅鉢は単弁の梅花を正面からみて図案化した紋章の名である。円を中心に、それより少し大きい円を5個ならべたものを「星梅鉢」とよび、これが梅鉢文様の基本形である。写真は「色絵沢瀉文德利」（高さ27.6cm、館蔵品）。1660年代の有田皿山の製品である。下ぶくれの胴にのびやかな筆致で沢



いろ え おもだかもんびん
色絵沢瀉文德利

有田 江戸前期
(1660年代) 館蔵

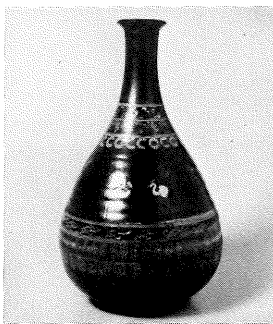
瀉文様を描いているが、とくに注目されるのは、その背景に描かれている文様で、松葉のような細い線状文を地として、緑と黄でいろいろられた梅鉢文様を散りばめている。東京国立博物館所蔵の「色絵雲文手付水注」（高24.7cm）には、同様の線状地に梅鉢文を背景に雲文を描いている。それには「1671」と陰刻銘のある銀製の蓋がついていて、この作品が寛文11年（1671）以前には有田皿山で製作され、オランダ東インド会社によってヨーロッパへ輸出された作品と考えられている。同様の背景地文をもつものは他に、壺、茶碗形德利、角德利、角形手付銚子などが知られている。

18世紀前半の有田皿山の作品で、皿や鉢の内面中央に、この梅鉢文の一つ描いているものがある。それには各弁に十字状の付属物がついていて、それをとくに五弁花文とよびならわしている。（吉永陽三）

シリーズ
やきものの技法 (11)
ぞう がん
象 嵌

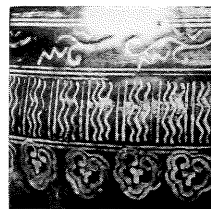
押印や彫りによって凹状の文様をつくり、そこに器体と色のちがう土を埋めこむこと。単なる押印文や彫文は古代の土器によくみられるが、象嵌による文様表現が最も美しいかたちで完成させられたのは、12世紀の高麗青磁が最初である。灰青色の地に白土や黒土が精緻な文様として埋めこまれている。こうした高麗青磁の技法は李朝陶器に引きつがれ、更に16世紀末から17世紀初頭ごろに、九州の陶器にもその技法が伝えられている。ヨーロッパにおいては中世には象嵌の技法が知られており、13世紀イギリスの「Chertsey tiles」は早い方の一例である。

象嵌はまず器体のまだやわらかいうちに押印をしたり文様を彫ったりして凹状の文様をつくる。次に色土を水にとかして泥漿にしたものを刷毛などで凹状の文様にそって盛りあげ気味に塗り、乾いてから余分な色土をかき落とすと、凹部に埋め込まれた色土が文様として現われる。象嵌による文様は、筆描きよりも輪郭がはっきりしていることや、硬くしっかりした印象を受ける点に特色がある。押印の場合はくり返しの文様が簡単なので、その意味では手描きより能率的といえる。しかし象嵌の場合は土を埋め込むという手間がいるため、刷毛目文様のように化粧土だけを用いて象嵌のような効果を出す工夫もなされた。



ぞうがんそうかくもんとうくり
象嵌双鶴文德利

武雄古唐津南部系(小田志) 江戸前期(17世紀) 館蔵



写真の徳利は、白く見える文様は全て象嵌の技法によっている。6段の圈線を回転しながら引き、その間に6種の印をそれぞれくり返し押印している。2羽の鶴も印刻によるもので、くちばしと足だけは鉄絵具で筆描きされている。（鈴田由紀夫）

陶磁資料寄贈者芳名

(敬称略)

〔昭和60年4月1日～61年3月31日〕

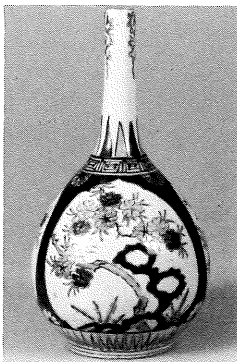
九州陶磁文化館へ資料をご寄贈くださいますようお願いありがとうございました。資料台帳に芳名を記し、永く保存いたします。今後とも、なお一層のご協力をお願い申し上げます。

またご寄贈いただきました資料は、新収藏品展(61.7.22～8.10)に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

- 工藤吉郎 東京都 色絵藤文皿、染付寿字菊文皿
小橋一朗 埼玉県 染付在銘輪花皿、染付福字草花文輪花小皿
富岡フミ 佐賀県 唐獅子置物
江口 茂 神奈川県 青磁瓶
笹倉一男 福岡県 褐釉叩き甕、色絵茶摘図茶釜
井村幸裕 京都府 染錦花籠図髹皿、染錦鳳凰柘榴文水注、染錦桜花文鶴首瓶、瑠璃釉唐獅子牡丹文角瓶、色絵桃梅牡丹文大皿、色絵八橋文水瓶、染付芙蓉手花鳥文大皿、染付柘榴文瓶、染錦楼閣鶏図皿
今泉吉郎 東京都 染付山水文鉢
藤山ヒテ 佐賀市 褐釉火鉢、染錦桐鳳凰文甕



そめにしきほうおうどくろもんすいぢゅう
染錦鳳凰柘榴文水注 有田
江戸中期(18世紀) 井村氏贈



そめにしきおう かもんつるくびりん
染錦桜花文鶴首瓶 有田
江戸中期(18世紀) 井村氏贈



そめつけさんすいもんぼろ
染付山水文鉢

有田 江戸前期(17世紀後半) 今泉氏贈



いろえやつはしもんすいびん

色絵八橋文水瓶 有田 江戸前期(17世紀後半) 井村氏贈



そめつけふようで かちゅうもんおおざら
染付芙蓉手花鳥文大皿

有田 江戸前-中期(17世紀末-18世紀初) 井村氏贈

利用案内

- 開館 午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始休館 12月28日～1月4日
観覧料 一般150円(100円)／大学・高校生100円(70円)／中・小学生50円(30円)／()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
交通 佐世保線有田駅下車徒歩15分